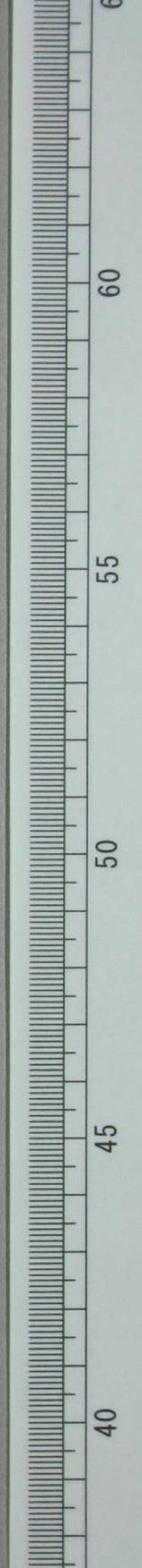
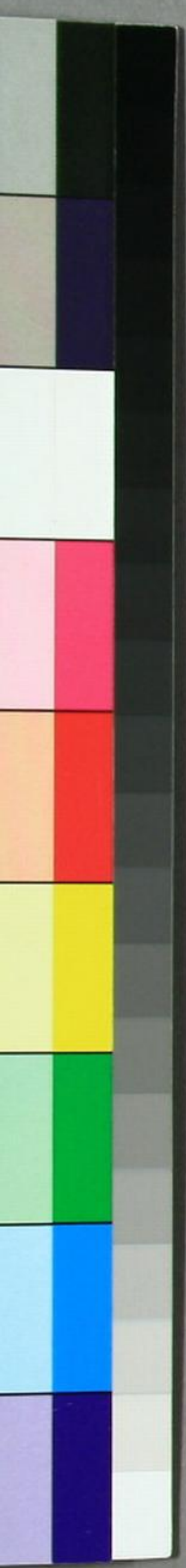


雲烟道眼録

亭

福来口の考証  
飯後、田口、大田、小田、切  
東都の岸山を以ての記  
大坂、備前、今をえらるに  
全書序

特別  
14  
1919  
142









る風集まるとも骨くわりのとんがらと云ふと黒姫山麓  
の流とす海を流す一里をうこの回命の怪鳥の  
窟を集まるとも八幡ふたともその窟の一奇蹟と云ふと  
あまを福来と云ふはゆきと云ふ十八ヶを呼ぶと  
今もその流との地名群衆を定まるとも黒姫山の頂上  
を左のめく記と云ふ

地志撮要云、黒姫山一名古志峰と云ふ福来は山中  
を流す大古収太河姫命此洞中をたまりて出雲の  
八千矛水(即大田之命)の妃と云ふと云ふ布川  
は福来と云ふと云ふ源し北流して海に入る業集

と流ぬはと云ふと云ふ是也。○或云、青の海の中、怪  
岩奇石の族集まると云ふと云ふは八十八個不の雲  
蹟と云傳へし(八十八個不と云後世八千矛水と  
漢を傳へると云ふ)此と云ふ古生層侏羅層  
の岩を云へ、大地の構造頗る怪しきと云ふ

流名川の産と云ふと云ふ玉求めて得し玉も、松尾湯  
し玉も、あたらしくき入の志あらくと云ふ  
(まゝあま)

福来と云ふは八千矛水の流を流す中をたまりて  
まゝし



○北浦原印運りも昔より奥水の量に乏しく近年石油  
世より多量なるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の  
量も乏しくなるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の  
地名も油の量流の中を流し運りて川を成てはる  
と云ふ、其の量も乏しくなるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の  
書紀の流も早く、奥水、本堂より流石の油、出干黒  
川村、天智紀七年、加四獻燃方、是也」と云ふ、越  
後此見記(文化三年撰)より、昭内川の(名)の一村より  
奥水出で、カクマと云ふ子を海に、溝くさけおくと  
油の附着するを、器に採集す、毎年此油の(量)

上二十あるを執り、一玉を一日に五つおぐを採り  
一升の代價る四五斗、銅云々と載す  
又又以て、江戸の人中川儀、在り、黒川の具水と云  
煉し、具水を煮ると火止をかく、石油、今名し一升の價  
二万四千八、利も江戸市中に、奴を煮を初め、公儀  
と云ふ、其の量も乏しくなるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の  
跡も乏しくなるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の  
尚、其の量も乏しくなるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の  
跡も乏しくなるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の  
跡も乏しくなるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の  
跡も乏しくなるに及ぶるに印運の量も乏しく石油の

和蘭書



其の古具して候むの事  
 〇廿織織もく乗つたはら  
 きのりも曲り申すお  
 着しつゝのこゝに  
 ちたつこの風景も何  
 寄つて眺めをきき  
 すとまゝと白く返  
 不

北城寺海云土屋渡、海を  
 石名古多し日々小兒

〇〇〇〇朝又えの如し  
 池のおおひく又小兒  
 池のほとりも又獨り  
 果してニツツ回つち  
 又新油の代にきき  
 草木の海へなほさ  
 のつゝとささるる  
 と天竺紀スル由、又北







見え流るるを嘆きけるは父の我事京都の上り  
し由をいふはしづかぬ都の奥山より成程と  
云ふの志ある人かきこひし母の死もいふ非ずし  
程のうらみもあはれに似しものもあはれに  
うらみをいふはあはれに似し程の志  
かよふ悲みはあはれ

今も往年雪中此色を思行せしことあはれし  
雪の思をいふは雪の思をいふ中へ此色を  
雪中一人の死するよあはれに擬葬をも死能を擬  
ふ載て、これを教千夜の日谷唐日、  
空すうと云

へりしと今も尚ほに思もいふ事此をいふ  
しづかぬことあはれに似しものもあはれに  
きよ、流るることあはれに似しものもあはれに  
形を怪しむる事いふは思ひを解する事

○中浦原郡の者の妻あつた家のまのいふ  
あはれ、うらみもあはれ、あはれをいふ  
か、此をいふはあはれ、あはれをいふはあはれ  
あを流るるを例として、離れやはあはれ、  
つものあはれ、あはれをいふはあはれ、  
か、あはれ、あはれをいふはあはれ、  
水もあはれ、あはれをいふはあはれ、



のちも附しと名くしく思ふにさうし。ふとある處との  
辭典をまきかきし。左の如く記し置し

栢の吹風土記に五家の名は川後の冷あるを法流と  
五派とあるを七地と云ふかあるは改訂よりし。正  
年中の事とある。具ある事といふものあり。興あるの  
即ち五家の因ありんれば北畠大太子記の事  
他とある如く五派のありき。そのありきありきありき。  
一説、飯島流より出ると解くといふものあり。

○余ら之故志船中関谷の荒平の土地をみせしことありと  
事本記にあり。其年まあるは。こゝにありきありきありき

年のころをあるけし。こゝに物を住す。乃ち其  
田新田とんくく。此の地と関を距るを十段可保の  
村の事と方ふ。北畠素行の東本。後して関谷と云  
ふを意川の峽谷と云ふが也。下関を距る車三と岐  
嶺あり。折峠と云ふ。これを給わんは十四谷と出づ。峠  
の麓より淵あり。大の淵と云ふ。湯あり。山居の  
光景木之蘇の枝あり。似たり。余ら之を  
枝と云ふし。こと廣く題し。又折峠。大の  
大の伝記あり。と傳へ。こゝに關し。傳記あり。切  
少の伝記あり。こゝに傳記あり。味を感せし。



今昔の世の辞典を撰するは、  
此の世を以て先傳説  
を掲げしむ

折峠の山に雲霧を月出づ。昔、  
龍の口くちし物を此上や。任あふれ、  
く出づるをすめり。山崩れ谷塞る。  
杖を打ちて此出づるを計らば  
しと死す。穴貫人、  
と云終る。昔も平し。盲目我命を  
と云ひ、  
こも盲目と平し。死者を  
お社

を言みて、  
此を正しく、  
折峠と今関谷村の属す。或は其流能の柳ありて  
小流を稱せり。此は神代昔の古傳の事あり。おち  
大蛇の轉訛する。古言の蛇川と云ふも大蛇の地なり  
と授引す。且此蛇の川は八口と云ふ。その大蛇を  
とて雷の形を鎮す。雷も此蛇の形あり。と云ふ  
皆古の夷族の魁帥を祀りて、  
云々此の古言の鳥上之峰。今大蛇の地を遺す  
又古言風を記す







米津地名遺り、抄ぬる岩船中三面山をいふ谷祝瓶山  
 西北八九里あり、平家池大納言の苗裔、池  
 大炊助の名も也、大炊助何の世も、此の位あり、や奈  
 の今のは三十餘年也、此山家をるに、海ありしを  
 ちんちん入る、一曰、其山をいづる谷あり、橋の  
 流、年々をえりて、怪をさる、いづる入る、之をさる、  
 すと云くと載る、此れも大炊助の家、文禄四年村上  
 家の家名表、其の畧、いづる、旅人通行を禁む、其  
 旨の控書一通を、収納し、其、代名の、幾多の、以、兵  
 の、あり、を、て、焼、こ、す、と

記す、暴奉を、廻、け、し、て、一、概、を、清、も、兵、を、免、れ、さ  
 り、し、り、い、く、し、七、習、俗、を、風、し、て、仙、師、の、思、あ、り、と  
 ○鳥坂山と中條驛の東端、いづる山、其の、家、名、冠  
 といふ、(故、り、ト、カ、サ、と、い、へ、し、り、遠、く、轉、訛、し、ト、カ、カ  
 と、い、ふ、ま、る、し、) 之、を、い、は、す、月、波、流、を、い、ふ、  
 と、い、ひ、橋、を、い、は、す、<sup>橋</sup>橋、を、い、は、す、<sup>橋</sup>橋、を、い、は、す、<sup>橋</sup>橋、を、い、は、す、  
 自、己、の、名、を、凍、梁、と、い、は、す、<sup>此、地、に、な、り、し、を、  
 余、印、の、西、本、の、山、名、を、い、は、す、  
 し、鳥、坂、山、の、名、を、城、名、盛、の、遺、蹟、と、い、は、す、其、の、  
 内、川、に、く、擲、を、出、こ、し、巨、木、を、板、敷、の、端</sup>



みちをしりしとすくふ、日西史を記し之を名する所の海  
もあつてしりしに其女是守(也)とてしる鳥辺のなるを川  
いれたることありし、其のとき校額のか跡をみるに  
飲味那の姫ヶ原のち改まるといふ説ありしゆ、と川  
いんか今もそのまゝありしとす、今もそのまゝありし  
の説をたえし初めは校額のか跡を中条のち改まると  
をいふこと

東鑑建仁元年四月二日條云、越後國馳騁卷申云、城守  
資盛(原注、助永男長用甥)於吉田、拒北國之輩、擬  
企叛逆、信濃越後亦不軍兵、雖龍名之、資盛振猛武

之間、不能破陣、云々、同五月十四日條云、信々未盛綱入  
道西念使者冬着、捧一封状、和田義盛持冬跡所、其状  
云、日未城小太郎資盛欲奉謀朝憲、構城郭於越後  
國鳥辺、近國之際、存忠直之輩、將雖未龍名、還忠以  
敗北、爰西念可及向之由、奉嚴命、件跡教吉云、月廿  
到着于西念之住所、上野國磯部郷、仍不迴時刻、揚鞭  
三箇日之中、馳下鳥辺、只則遣使者於資盛、相解所教吉  
之趣聞、答早可来城也之由、因茲其及勇士等、于時越  
後信濃、信濃三箇國、爭鋒競集(中略)資盛以下城  
徒飛矢石、不異雨脚、又有資盛之姊母、令節坎窞、御前







あまのむすこ 倭倉の人と云 漢してハシカリと云ひ 坂野の  
文字をあてしむ 坂野と云ふ所も古典なき名称  
と云ふ 飯角の地名も今も鳥取山の下のところ

同辞典 筑前郡鳥取の條下より左の如く記せしむるを考ふるべし  
今 姫川原、除戸、中宿を併せまゝの村と云ふ

越後野志云、高城ハ 姫川原と云ふ、往來要所として林をのみ、  
城址方七所許、城家代々の城地なき、御海防志云、上板倉  
御姫川原ハ 鶴冠の城址あり、丘山鶴冠の状あり、姫川原は  
火見う原の義あり、烽火を望みし地と云、此傳を越後  
の地名も、高城御氏の所品と云ふ所もあらずと云ふ

郡富坂又北蒲原のやむ夜ありと云一又三地あり、いつのん  
を板野のの記し、鳥取と決定し難し、○按、地志提  
要ハ 憲弘長和の陰、平維茂邑を筑前郡と云ふ、  
子孫繁茂秋畠の任ハ 城を以て氏と云ふ、と云ふ、其維  
茂が筑前郡ハ 食邑しと云ふ、何書する據んや、  
同書又「城資常建仁元年筑前郡鳥取を據りて」と云  
ふ、と推して、姫川原の廢址をば、資盛の鳥取城と思  
惟し、更に其祖先維茂ハ 此と云ふと撰定し、  
里ハ 盛衰記、玉海、吾妻鏡並に往來要所を合考する  
と、城氏は下細敷の、安原一ツの、下細敷を據り



諸郡鄰好もて風靡せしめんと思はるるに、筑後  
郡の佐茂の邑ありしと云ふ高野の寺あり、又鳥坂城  
址も下城の奥山麓に現存す、筑後郡を筑後の筑  
搦と雖し、或は佐々木盛綱が上州破部卿と云ふ  
一と鳥坂のふり着せしとの説を以て里程を推算  
し、鳥坂の是津を論ずるも、一知半解の論、  
十分の透徹を缺くべし

○乙 キノト村この名義もつきりくくの説あるも、行を揚  
きうたし、後、山まき向く、此地に沼毛岩船兩柵の  
中間をけらば、柵間と云ふ、俗説もあつても、乙寺

の二王門を岩船蒲原の交界きうと云ふも、この名義柵  
の間をくしと傳ふも、似やと

明治二十年四月廿六日、余牛込、ある所の橋を  
と名を朝来由らうとつと出る能く、一のを  
考へ、由らうと別る、  
本地名辞典を繕き、  
考證特種古物を解く、  
つあし、以つて、  
考證少入

考證少入



苗族紀聞

支那の苗族ある尚るアインアウアムシ、其の人種を  
異にする瞭然とせしむるも其の人種の原つゝをいふを  
てそまを確定せしむるは以るを龍虎とて人種  
支那の地を苗族と訪ひしして確定するをいふを、而し  
て今といふに其の結果をいふるをいふる。此の偶  
々北流の檀几葉書を取ると後、中々苗族紀聞と  
題する書あり龍虎方言威寧村の著りしを苗族の風  
俗と記するを詳也即ちその其の全文を抄すとす  
明正二十二年四月十日

自沅州以西、即多苗民、至滇黔更繁、種類甚夥、曰黑脚  
苗、曰花苗、曰狃狃、曰仲家、曰蔡家、曰龍家、曰轉兒、天曰  
保羅、曰擺夷、曰羅鬼、皆苗裔也、但有生熟之異、生者匿  
深箐月中、不敢出、無從見、熟者服力役、納田稅、與漢人等、  
徃々道上見之、男子椎髻于頂、纏以布、或青或白、少者束  
髮如尾、連于髻、若瓶把然、纏頭之布、綴以小貝、燦々可  
視、衣皆青布、貧者則衣草、壯者衣布、結小袋而長等  
身、疑弁服之遺也、婦人髻高一尺、膏以脂、先可鑑人、蚶  
娜及額、類蠱而銳、倘所謂烏蠻髻耶、無老少、朕皆  
約環、環皆銀、貧者以紅銅為之、項著銀圈、富者



多至三四耳。錦、晶、系、及肩、衣以五彩帛，錯如繡衣，無中衣，止板裙百折，裙亦五彩，無帛者，以花布代之。間亦純青，僅及脛，赤足草履。所居在山奧，去孔道遠，近岳之土，無不開，貿易以日所屬為場，如宣為虎場，卯為兔場，各有分地，不相紊。場之日，男女畢集，商賈往為，常往其地者，熟其風俗云，其婚也無媒妁，男子壯而無室者，以每年六月六日，午將曠，悉登山四望，吹樹葉作啾啾聲，則知為馬郎至矣。未字之女，羣往從之，任自相擇，配先合而後議婚，視世之好惡，以定聘之高下，聘無幣帛，唯牛若干，猪雞若干，父母不受聘，聘婦留氏云。

還娘錢，如女多，以一婚留家，留男則不復取聘矣。婚後不同寢處，唯和媾，俟孕而乳，始同為一人，率多力，以背負物，無七箸，以手持食，無竈，生火于地，懸釜以炊，老幼男婦尊卑，列無序，環釜席地而坐，出入必佩一革囊，中納弩一、刀一，以善闘也。即僮之于漢家，賃春行汲，必佩以從，亦知孝事父母，呼父曰阿爸，母曰摩，兄曰个轟，弟曰阿濟，妻曰買住，如遇父母之喪，不棺不斂，刺豕烹葵，炊米釀酒，呼其祖宗而祭之，云以化者相托，聚族類餒其餘，羣助以力，舁而之山，坎其土，削大木四相，出中，奉尸入而瘞之，不封不柩，瘞後不復再至其地。歲



時唯野祭耳。祭則豕一粗去其鬣，烹以薦，穢其血皆不除。云敬也。無跪拜禮，惟俯伏誓願而已。祭畢，即于野分食盡，始歸。呼漢人為客，客入其室，屋除所貨物，不得他攜持以進，蓋多所忌也。最忌者箕，其藍云其祖宗所畏，其屋甚卑，樞可俯，然皆有樞，上居人，下即畜雞豚牛馬，雜穢不治。客至，一寨之人皆延至其家，爭為設食，食惟二器，飯一，雜肉一，器皆剝木為之。如樞櫪而小，即十數家亦日遍之。若有至有不至，則媿怨生焉。至食之多寡，惟聽客，不相強也。主其家者，呼為同年。同年媿，彼則視如親戚，或欲之他寨，必遣一人伴之往。

未防不虞也。或有誚弄其婦者，知即殺之。然無賴者亦常得利焉。彼中自相仇讐，言甚多，至不解，以及世若世仇，不獨然家之子弟，即戚串及同寨者，皆不得徑仇我者。畏，徑必維繫之，先飲以飲食，勒盡飽，繼縛其手足，捶楚備至，令殆而盡吐其食，乃止。以長木繫其頸，械其足，使旁寨人通聞其家，令備牛馬以贖。贖其家不自備，責索于怨家。或怨家贖不如期，不如數，則斃之。其人斃，則怨家倍所贖牛馬之數以償。若不際，爭論不已，則彼此期以日，地，辨曲直。地必酌道里之中，無偏近。屆期，兩寨之人及兩家戚屬，以弓刀徒，左右列，中設天鏡，滿貯水于



中置一介，燃以沸，沸熟不可執，而造各言是非，言竟互鳴，金聲震林谷，金盡，彼此仰而呼天，移時，各以手入沸湯中，取介，得介而手無恙者為直，焦爛者為曲，如直在左，則右者奔，奔不脫者，羣執而殺之，雖死數人者，不敢校，死者家亦不敢向怨主償，云天所命也，曲者復備多牛馬以請成，右直亦然，俗無文契，凡稱貸交易，刻木為信，未嘗有渝者，木即常木，或一刻，或數刻，以多寡為遠近不同，剖而為二，各執一如約時合之，若符節也，尚勢力，弱役強，負役富，負者多時出為盜，明時如清平落，邦平，越新添諸道口，行旅伴少，則不敢出諸塗，今則

行千里，不持寸鐵，蓋遠人之畏威懷德也，慨自羽格以來，夜郎自大，漢武帝始通西南夷，而楊僕樓船及後，馬援銅柱，以迄五月渡瀘，七為擒縱，南人始不復反，唐宋時屢服屢叛，大擾軍興，明初傅沫二公帥師戢略，數年始克，至正統嘉靖萬曆年間，順逆不常，師武臣力不知凡幾，亦惟四羈縻而已，孰有如今日王師初下，即帖然拜耳，列就編氓者哉，惟在後之蒞茲土者，宣布帝化，董之以威，柔之以德，將見億萬斯年，胥格其俗而為禮樂之鄉矣。











余の旅中、やゝおもしろき事なきが、今又檀几農者をとん  
と帰人鞋襪をふ載つてそと、其の跋のゆゑ、修木洞世訓  
を引て纏足の用を并してそと、噴飲のあつて、  
ぬを左のめくひき

本壽州千四日、女子必纏足、何也、其母曰、聖人重女使不  
輕本、是次裹其足

○又跋の地理、移るるが、今行城塚関山の中、  
と田口と多野驛がある、こゝに、  
くあり、  
の進行と想あはる、  
の強強、

あことあつて、こゝをゆく、  
まゝ、こゝに、  
せし大田の、  
な、  
すも、  
ん、  
崖、  
ら、  
あ、  
のとき、  
外輪山、  
高嶺、  
大嶺、  
山、  
嶺、  
の、  
輪、  
状、







史の丹波志を撰むにあつて、十二三行の比喩より市島村の古くは龍の足元なる其傳説の中より古きとありて其の龍の足元なる今又地名字典の龍の思ひ出し此の辭典の何とあるかと神の足元なる六張丹波志を校讎して是を、即ち丹波志氷上郡上田と云ふ項下の左の如くありてある

今龍原と合同し其見村と改む鐵道車驛と市島と字ありて地ありて丹波志云市島は上田の支村なりと此を去見庄又と庶聚庄と稱す市島は去見氏ありて家系は痛冠者範頼の次男、去見三郎賢

重、丹波志庶聚郷に移り其裔孫武部少輔則重、天正十年、明留のつる夜城とくると

個村の古くは、即ち市島驛と改む鐵道驛の一駅は方改むと福山、行くはなるステーションにありてある石生を去りし新井をば市島、竹田をいふ福山は着くをあると、福山を極北の交わりあり、大改むと四の字ありと云ふ事なりと云ふ(四月廿三日)候に方改む出のけはなる候に候行ける事なり、一寸計りて見ると思つた、四時と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり







んはきん、ひて教之を思ふに此宛書年せしめれ  
 ぶ、そのまゝに口書とすし、定法のをとを  
 と猶書し、し又なふ、其の法、末左の如くある

- 一 鐘鼎字源 (完) 大人増補 五冊
- 一 九經字樣 干祿字書 (完) 大人増補 一冊 簿系 本小
- 一 新加九經字樣 (完) 一冊 小
- 一 五經文字 (完) 大人増補注 三冊 簿系 小
- 一 漢字家千字文 (完) 大人補注 八冊
- 一 偏旁書四十印 家編 三冊 簿系 小
- 一 四體三千字引 全上 (未定) 四冊

- 一 字學零篇 編次や未定もの (假り標註) 三冊
- 一 法帖臨書 大 一冊
- 一 復古篇 (完) 大 一冊
- 一 書法西傳 大人字未定本 一冊
- 一 象山上方 大人字 (完) 一冊
- 一 錢錄 大人手字未定本 一冊
- 一 説文五万四千部 小 一冊
- 一 篆隸 小 四冊
- 一 紙衣集 大 一冊

此外説文古抄補補汗簡五冊と大人の























天野田中と侶をうへと梅見を見物に出うけたりと先  
 以事改のあき期に三日目とを物と………と二三の跋  
 いかん間跋もあらふ他の作跋も出ぬ所揃うし  
 いかんかき只の折て………跋もろくとも先かよを  
 加奈太跋と近めぬ、この一跋も加奈太自筆の書と高紙  
 の海別○のえこに他邦の一おも交へず、跋別品中を登  
 の者事固………撰抄………ととる今を目と表  
 きしと跋別方のあつても巧め………と例へ用紙釘  
 のつとき又縄束の………とこれと既味の………と  
 多跋別………人の目と揃………の難………と

と而………一擲別………本邦人………と目と  
 き一程の………を有………と美術品………と美術  
 の………と跋別………もの………と………と  
 ん………と………と………と………と………と  
 を………と………と………と………と………と  
 蓋し………と………と………と………と………と  
 此の………と………と………と………と………と  
 若………と………と………と………と………と  
 説………と………と………と………と………と  
 別………と………と………と………と………と



換言を結ぶ物もすむる物も海列してあるもの  
比、その外周への流をスペースと利用するの始終に  
言を添へる、一、そのまゝ、二、物をもつて  
代り、三、物をもつて、四、そのまゝ、五、物をもつて  
五、物をもつて、六、物をもつて、七、物をもつて  
八、物をもつて、九、物をもつて、十、物をもつて  
十一、物をもつて、十二、物をもつて、十三、物をもつて  
十四、物をもつて、十五、物をもつて、十六、物をもつて  
十七、物をもつて、十八、物をもつて、十九、物をもつて  
二十、物をもつて、二十一、物をもつて、二十二、物をもつて  
二十三、物をもつて、二十四、物をもつて、二十五、物をもつて  
二十六、物をもつて、二十七、物をもつて、二十八、物をもつて  
二十九、物をもつて、三十、物をもつて、三十一、物をもつて  
三十二、物をもつて、三十三、物をもつて、三十四、物をもつて  
三十五、物をもつて、三十六、物をもつて、三十七、物をもつて  
三十八、物をもつて、三十九、物をもつて、四十、物をもつて  
四十一、物をもつて、四十二、物をもつて、四十三、物をもつて  
四十四、物をもつて、四十五、物をもつて、四十六、物をもつて  
四十七、物をもつて、四十八、物をもつて、四十九、物をもつて  
五十、物をもつて、五十一、物をもつて、五十二、物をもつて  
五十三、物をもつて、五十四、物をもつて、五十五、物をもつて  
五十六、物をもつて、五十七、物をもつて、五十八、物をもつて  
五十九、物をもつて、六十、物をもつて、六十一、物をもつて  
六十二、物をもつて、六十三、物をもつて、六十四、物をもつて  
六十五、物をもつて、六十六、物をもつて、六十七、物をもつて  
六十八、物をもつて、六十九、物をもつて、七十、物をもつて  
七十一、物をもつて、七十二、物をもつて、七十三、物をもつて  
七十四、物をもつて、七十五、物をもつて、七十六、物をもつて  
七十七、物をもつて、七十八、物をもつて、七十九、物をもつて  
八十、物をもつて、八十一、物をもつて、八十二、物をもつて  
八十三、物をもつて、八十四、物をもつて、八十五、物をもつて  
八十六、物をもつて、八十七、物をもつて、八十八、物をもつて  
八十九、物をもつて、九十、物をもつて、九十一、物をもつて  
九十二、物をもつて、九十三、物をもつて、九十四、物をもつて  
九十五、物をもつて、九十六、物をもつて、九十七、物をもつて  
九十八、物をもつて、九十九、物をもつて、一百、物をもつて

ひあつて、文をうへて、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、物をもつて



ありしものあり、北風目々着いたるを、加太より太平洋の  
 汽船の航路を、海を擬する大なる盤を必し、その  
 支那方面の航路を一目瞭然たるにせしむることあり、  
 此の航路を是れ開く可く、之を区画の一事ありん  
 べし  
 此の航路を出て、支那の北を沿うて、格下は、こゝを  
 果物と云ふ、航路は、北に、保夜と云ふ、その  
 を、支那の北に、格下は、北に、保夜と云ふ、その  
 航路を、支那の北に、格下は、北に、保夜と云ふ、その  
 の外部を、支那の北に、格下は、北に、保夜と云ふ、その

ありしものあり、北風目々着いたるを、加太より太平洋の  
 汽船の航路を、海を擬する大なる盤を必し、その  
 支那方面の航路を、一目瞭然たるにせしむることあり、  
 此の航路を是れ開く可く、之を区画の一事ありん  
 べし  
 此の航路を出て、支那の北を沿うて、格下は、こゝを  
 果物と云ふ、航路は、北に、保夜と云ふ、その  
 を、支那の北に、格下は、北に、保夜と云ふ、その  
 航路を、支那の北に、格下は、北に、保夜と云ふ、その  
 の外部を、支那の北に、格下は、北に、保夜と云ふ、その











兒多指縁を例し、ゆゑを仕る事、ゆゑに、  
 まゝをゆゑとて、衣終つて、人の、  
 他を、ゆゑを、三井や、ゆゑを、  
 あり、ゆゑを、ゆゑを、ゆゑを、  
 あり、ゆゑを、ゆゑを、ゆゑを、  
 を、ゆゑを、ゆゑを、ゆゑを、  
 秘決する、ゆゑを、ゆゑを、  
 う、ゆゑを、ゆゑを、ゆゑを、  
 此、ゆゑを、ゆゑを、ゆゑを、

為、ゆゑを、ゆゑを、ゆゑを、  
 あり、ゆゑを、ゆゑを、ゆゑを、  
 コ、ゆゑを、ゆゑを、ゆゑを、

- 一 洋魚、鰯、鰯、鰯、鰯
- 一 鶏汁、羊羹
- 一 焼、鶏、及、鰯、抽、汁
- 一 羊、背、肉、切、焼、及、鰯、三
- 一 鴨、莖、菜、及、洋、菜、抽、汁
- 一 牛、筋、肉、莖、菜、及、鰯、三
- 一 杉、葉、の、湯、浸







昨、高橋の冷蔵庫を視たが、館は美術  
 と今も話し且つ遊しと云ふ  
 冷蔵庫の構造を報告する石の冷蔵庫の構造  
 冷蔵庫の構造を報告する石の冷蔵庫の構造

●冷蔵庫を觀る

(在大阪一記者)



△昨小開を得、冷蔵庫を視たが、館は美術  
 館の前を下りキーン館の右である、本邦で  
 は初めての建設でもあり、特別なる絶熱的  
 の建造を要するので、四周の壁は勿論、天  
 井地板等に至るまで其幅何も一尺五寸宛の  
 厚とし、其壁の中間に絶熱材として粗設を  
 充弁してある、斯の如く真に困難なる建築  
 であるから、其係りの人達は一通りならん

苦心をしたそうなる  
 △この建築設計者は理學士吉岡哲太郎君で  
 態々東京から工人を呼寄せたので、ヤット  
 出来たのは出来たが、開場當日の間に逢は  
 ないので、漸く本月の七日から諸人の入場  
 を許すことになつたのである  
 △冷蔵室が六十九坪餘で、機械室が六十二  
 坪餘、そして其築建費が一万九千八百八十  
 円で、器械費が二万九千九百七十五圓である  
 △此館は頗る狭隘であるのみならず、多人  
 數入場せば自ら室内の温度を増加する憂が  
 あるから、一時に五十人以上の入場を許さ

ない規定で、夫れ故丁度記者の至りし時は、  
 館前恰も羊腸として長蛇の陣を張れる如  
 く、又子供の鬼の子捕ふの戯を演せる如く、  
 老若男女幾百人のものが入場せんとして後  
 へ後へと一列縦隊に連絡し居たるが、中に  
 もヅルキ者は後より来り窺かに列の前に加  
 はらんとして、警官のお眼玉を頂げるもあ  
 り、又入口に立てるお役人は、一々人数を  
 取調べつ、許可して居つた  
 △館の入口の右側に滴々たる水の水煙の中  
 に落下せるものは、室内の機械によりて壓  
 迫し、熱を發散せるアンモニア瓦斯に、冷  
 水を灌ぎ、これを冷却せしむる装置で、此  
 灌溉用水は臺上の噴水池の排水を利用せる  
 ものである  
 △第一室に入れば、一箇のアンモニア瓦斯  
 壓搾器と二箇のモートル及び二箇の蒸氣ボ  
 ンプとがあるアンモニア瓦斯壓搾器は英國  
 リンデ式にして現時尤も廣く行はれるもの  
 でアンモニア瓦斯を壓迫し屋外の凝縮管に  
 送り居れりモートルの一は二十馬力他は十

馬力を有し連合動力を顯はし居れり、ポン  
 プの一は冷却せる鹹水を汲み上げ各管に輸  
 送し居り、一はアンモニア凝縮管に灌溉す  
 る水を水溜りより汲み上げ居るのである  
 △此他に一隅に上下二管の装置がある、上管  
 は鹹水冷却用膨脹弁で、下管は空氣冷却用  
 膨脹弁である、又日本冷蔵商會より頗る精  
 巧なる冷蔵庫の模型の出品がある、そして  
 此室の壁上に本庫冷却装置に就て説明の額  
 面が懸つて居る、理化學に冷たい本邦人には  
 此説明書は、あながち無益でなからうと思  
 ふ、説明書の要旨は大略左の如くである  
 本庫冷却装置に於てはアンモニア瓦斯を凝縮して  
 押し其容積を減縮し之れを屋外にある凝縮機に  
 冷水を灌漑して凝縮し其液体となるに及んで之れを細  
 管にて一々空氣冷却室中にある多数の凝縮管中を導き  
 膨脹せしめて室内の空氣を冷却し一は鹹水溜りに通じて  
 膨脹せしめば鹹水冷却す、冷却せる空氣は室内に設置  
 せる扇風機に由て冷蔵庫内へ輸送し室内及通路の冷却  
 に供し同時に空氣を凝縮せしむ  
 冷水溜りに鹹水を凝縮せしめ水を凝縮せしめ又鹹水の  
 一部はポンプにて汲み上げ多量の冷却管に輸送し以て  
 室内及び通路内を冷却す  
 △第二室に至れば鹹水量約二十五石を容る  
 べき鹹水溜がある、鹽化石灰二千封を溶解



したる鹹水(比重一、二)を充たしたるもので、其液中に装置せる多数の連續管中のアンモニア瓦斯は膨脹して潜熱を吸収する、夫れ故鹹水は冷却され頗る低温のものとなる、之れを攪拌器にて攪拌せば見事なる氷塊を生ずるのである

△此室内に更に一の密閉せる小室がある、此小室内には多数の連續管があつて、尤も冷却せる空氣の充満して居る、傍らに装置せる扇風器は二馬力を有し、頻りに此冷却せる空氣を冷蔵室に輸送しつゝある

△第三室は剛ち冷蔵室にして、此室内をも數箇に區劃されて居る、其第一室に入れば

室の兩側に各種の陳列がある、其陳列品の重なるものを擧ぐれば、住吉植物園の富士山の箱庭、此富士山頂の積雪は、實に本館製造の水を其費用したので次に風月堂の菓子、大阪難波場又出品の水結魚である

△第二室には大阪製氷會社出品の裝飾用として水結せる牡丹花は真に美しく、京都鬼燒蒲餅司、大阪又及び徳島縣久米イシ出品の魚類、風月堂出品の菓子、大阪藤本商

△此室の中央の通路の温度は凡そ華氏の五十度位で陳列室内は同二十度内外である、尙ほ特別の設備は牛豚魚類果物の如き臭氣ある室は常に二箇の扇風機によりて一は新鮮なる冷氣を輸送し、一は此腐臭せる空氣を放散せしむる装置になつて居る

△終りに臨みて一言したきは本庫は前にも記した如く、初めての建設の割合には比較的成效の方で、技師の苦心焦慮の様もあり、と見える、我輩は此技師の勞を頗る多とする、本邦の位置幸に温帯圏に屬すれども、其食料品は夏期に至れば概して長時日を保つとが出来ない、今や肉食は日に盛大になるべき傾向があるが、料理店並に食料供給店等は宜しく此模範藏庫に鑑み、多少經營するところあらば、其幸實に我々のみ

△此室の中央の通路の温度は凡そ華氏の五十度位で陳列室内は同二十度内外である、尙ほ特別の設備は牛豚魚類果物の如き臭氣ある室は常に二箇の扇風機によりて一は新鮮なる冷氣を輸送し、一は此腐臭せる空氣を放散せしむる装置になつて居る

△終りに臨みて一言したきは本庫は前にも記した如く、初めての建設の割合には比較的成效の方で、技師の苦心焦慮の様もあり、と見える、我輩は此技師の勞を頗る多とする、本邦の位置幸に温帯圏に屬すれども、其食料品は夏期に至れば概して長時日を保つとが出来ない、今や肉食は日に盛大になるべき傾向があるが、料理店並に食料供給店等は宜しく此模範藏庫に鑑み、多少經營するところあらば、其幸實に我々のみ

立衛出品の生寒天等である

△尙ほ本庫現時の冷蔵品を分類詳記せば

野菜	二九	品名	四六
水豆腐	三五	魚類	二八
料理品	一〇	酒類	二〇
菓子	二〇	醬油	一〇
水	二〇	草	一〇
肉類	二〇	冷却	一〇
鹽	二〇	子	一〇

他大阪井谷重興門出品の水豆腐、大阪松下

立衛出品の生寒天等である

△尙ほ本庫現時の冷蔵品を分類詳記せば

野菜	二九	品名	四六
水豆腐	三五	魚類	二八
料理品	一〇	酒類	二〇
菓子	二〇	醬油	一〇
水	二〇	草	一〇
肉類	二〇	冷却	一〇
鹽	二〇	子	一〇

豚等は一見の價値がある、又此室内の通路には神戸電燈會社及大阪製氷會社等より大氷塊の出品がある

△次の室には大阪薩摩屋、土佐屋、山田屋等より夥多しき雞卵の出品又札幌農學校より林檎野菜等の出品があるが此等は云ふ迄でもなく何れも天下の絶品と認めらる、此



甲子年四月

甲子年四月



以下全て  
白紙



向沼三十二年  
四月下浣起筆

春城字人